日本医史学雑誌第三十八巻第一号
平成四年一月三十日発行　平成三年八月十七日受付

# 備前蘭学の開祖児玉順蔵と漢蘭折衷医難波抱節

中山沃

岡山県における蘭学の系譜は、大きく別けて、杉田玄白―宇田川玄随系とシーボルト系である。そのほか、杉田玄白に直接師事し外科を学んだ美作勝間田の医師小林令助(一)がいる。

宇田川玄随の蘭学は、玄随の死後、宇田川家を嗣いだ玄真（安岡氏）、榕庵、與斎に受け継がれ、明治を迎える。一方、玄真の門人坪井信道に入門した津山藩医箕作阮甫、足守藩の緒方洪庵はそれぞれ江戸、大坂で蘭学の花を咲かせた。また玄真の高弟海上随鷗の「社盟録」に三名の岡山人、すなわち倉敷の賀川周哲（南龍）、備前藩医佐治玄圃、備前和気郡北方村の武元登々庵が名を列ねている。

シーボルトの鳴滝塾には備前岡山の児玉順蔵、美作勝山の石井宗謙、備前建部の石坂桑亀が入門している。またシーボルトの門人の伊東玄朴の象先堂には備前、備中、美作出身の十六名が入門している。

宇田川玄随系蘭学は江戸を中心とするものであり、箕作阮甫の活躍の場はやはり江戸であり、緒方洪庵の蘭学は大坂であった。江戸、京坂は東西における経済、文化の中心であり、特に江戸は幕府、すなわち政治の中枢で、全国の頭脳が集中した。これらの蘭学社中の活動、業績、人物像及び門人達の活動については多くの書物に書かれている。また最近筆者は海上随鷗に大坂で蘭学を学び挫折した眼科医であり、漫遊詩人として京都で一生を終えた武元登々庵についての足跡について記述した(二)。そこで備前の蘭学の開祖とされている児玉順蔵について述べてみたい。すでに森紀久男著『備前洋学の

始祖児玉順蔵先生』[三]があり、その後の資料すなわち井上忠校訂「武谷祐之著、南柯一夢」[四]、田中助一先生の発見資料[五]、児玉家から筆者が仲介し、岡山大学へ寄贈された順蔵の遺品[六]、筆者の武谷家墓地展墓などを参考とし、一地方の蘭学者児玉順蔵の辿った足跡を追ってみたい。

そしてもう一人、児玉順蔵と同時代に生き、備前藩家老日置氏の侍医として、漢蘭折衷派の地方医でありながら天下にその名を轟かせ、牛痘接種の普及に力を尽したが、安政六年（一八五九）のコレラ大流行に際し、患者の治療に従事中、不幸にも感染し急死した難波抱節について述べてみたい。抱節については岡山の地方史[七]に、彼の産科学については『日本産科学史』[八]について記述されている。抱節及び長男経直の旧蔵書[九]が労働科学研究所[一〇]に収蔵されており、最近筆者はその一部を閲覧することができ、多年の懸案を解決することができた。

## 一、児玉順蔵（一八〇五―一八六一）の蘭学

文化二年、備前藩家老伊木家の侍医児玉泰順の子として生れたが、父の死により、文化八年八月、七歳で跡目相続を許され、五人扶持を支給された。しかし主家への自奉公書[一一]には十七歳と記されている。主家から許された偽の年齢である。以下は本当の数え年齢で述べる。

十三歳のとき、すなわち文化十四年三月から十一月まで八ヵ月半、主家の許をえて、赤穂藩藩校博文館の督学で儒医の神吉主善（ママ）のもとで医術を学んだ。十数歳の医師では主家でも、また社会的にも信用度は薄く、伝え聞く蘭方医学修行に胸を燃やしたのであろう。十八歳の文政五年（一八二二）、近親にも告げず、秘かに脱藩し、長崎に姿を現わした。翌文政六年八月長崎に来港したシーボルトは翌文政七年（一八二四）長崎郊外の鳴滝に塾を開いた。順蔵がどのような経緯でシーボルトの門人になったかは不明で、最近までシーボルトの門人であるという直接の資料は未発見であった。田中助一先生は先年、長州藩萩の御用商人熊谷家文書中に次の順蔵に関する諸資料[五]を見つけられた。

資料一、順蔵が熊谷五右衛門に送った薬の処方を記した文書

二、岡山から熊谷五右衛門宛書簡　一通

三、岡研介の五右衛門宛書簡　三通

四、順蔵の和歌短冊　二枚

資料一、①口上　シュストル処方差送申候、御受取可被下候　以上

十九日　順蔵

五右衛門様

②「ヨングステ　シュストル処方」と記し、つづいて煎剤と丸薬の処方と用法を述べている。そして○印のホフマンス、エイズルティンクテュール、イペカコアナ、タンキリ、は「差上申候」と述べ、最後に、

「御容躰シーホルト旅より帰省之上、申上候、何分早く罷帰不申候てハ治療難仕、シーボルトも申居申候、必必乍御面倒御製可被下候

以上　順蔵

五右衛門様」

順蔵はシーボルトのもとでオランダ語および医学を学ぶと共に、他の門弟と同様、植物の探索を命ぜられた。しかしシーボルトから支給された旅費などを浪費してしまい、復命することができなかった。そのため鳴滝塾を去らなければならなかった。シーボルトに就学の直後は勉学にいそしんだ順蔵も、次第に国際色豊かな港町長崎の紅燈に染っていった。頻繁に青楼（遊女屋）に足を運び、旅館に娼婦を呼び寄せ遊興に耽った。そのためシーボルトからの研究費もこのために使い果してしまった。この間の所行は、同じシーボルトの門弟岡研介が長崎滞留中の熊谷五右衛門にあてた書簡（資料二）の中

に述べられている。すなわち、

「順三（蔵）儀先便ニ申上候、実ニ御存し之通風聞ニモ御聞及有之と奉存候、兎角虚言計りて御座候、段々悪行（傍註、出島破法青楼□□）有之候間、却て貴家之名ニも相系り可申哉ト奉存候。兼て御心安仕候間、右申上不仕候ては無念ニも可相成と奉存候間、右様申上候、参り懸には小子杯方ニも参り、書物会読可仕様申居候へ共、頃日は旅館ニ娼婦呼寄セ候様承り申候、一度も吉雄抔江ハ参り不申、右は申上候通御心中にて左様御思召御心得ニ可被成候、申も疎ニ御座候へ共、時候御用心専一ニ奉存候、恐惶謹言

九月十三日　　岡　研介

熊谷五右衛門様」

また次便（九月二十五日書簡）でも、「順三狂妄大方ならず、段々申合せ心配仕候」と伝えている。筆者の推測によれば、これらの書簡は文政八年であろう。このような遊蕩で師を裏切り、友人からは見はなされ、長崎におることができなくなり、郷里岡山に帰るより仕方がなかった。帰途筑前鞍手郡高野村（現若宮町大字高野）の医師武谷元立[一二]（一七八五―一八五二）の家に立寄った。恐らく順蔵の懐中は無一文に等しかったであろう。武立は順蔵からシーボルトのオランダ医学の卓越している話を聞き、同志の宗像郡の百武万里、鞍手郡内有吉周平ら十数名と共に彼の講義を聴いた。翌文政九年（一八二六）正月九日（西暦二月十五日、以下、月日は西暦）、シーボルトは江戸参府のため長崎出島を出発し、二月二十日に木屋瀬に到着し、石橋甚三郎方に宿泊した。これを伝え聞いた元立は順蔵に、木屋瀬のシーボルトの所へ行き、前非を謝罪すべきであるとすすめられ、元立に従行し、石橋方にゆきシーボルトに面接した。シーボルトは久しぶりの再会を喜んで話ははずんだ。シーボルトはすでに日本語をたくみにあやつったが、順蔵はオランダ語会話を中断していたので、話すことも、理

解もできなかった（ハナハダ嘔啞タリ、「南柯一夢」[四]紀要十号）。元立の勧めにより、順蔵はさきの妄費の償い金をシーボルトに差し出したが、シーボルトは元立の情誼懇篤を感じ、これを受け取らなかった。順蔵は再三受け取ってほしいと申し出たが、元立に贈るといってとうとう受け取らなかった。そして夜遅くまで親しく語り合い、高野村に帰った。翌文政十年（一八二七）、元立は百武、有吉及び糸島郡の原田種彦らとともに長崎に出て、翌十一年シーボルトの帰国までその門弟として蘭方医学を学んだ。そのため順蔵もこの頃郷里への帰途についたものと思われる。脱藩したため、すぐに岡山に入ることができず、親類のいる備中下道郡箭田村（現吉備郡真備町）で開業した。それは文政十二年（一八二九）頃であったといわれている。数年後帰参を許された。「児玉順蔵奉公書」に、「天保五年（一八三四）午八月二十三日帰参被仰付、五人扶持被下、御医者次席ニ被仰付候」と記され、脱藩以来中断していた奉公書の記述を再開している。

岡山府内の西中島に居を定め、医業のかたわら私塾を開き蘭学を教え、またオランダ医書を翻訳し出版した。すなわち天保十年（一八三九）に『外科原式』二巻（創傷則及び潰瘍則）を発刊した。門人には島村鼎甫、石井信義、明石退蔵、長瀬時衡、津下精斎、岡野松三郎、花房義質（以上七人はいずれも適塾に入門している）、松岡隣、松本練平、黒田綱彦、大原利謙[三]の名が挙げられているが、はっきりした資料のあるのは花房、松岡、黒田の三名である。

当時の備前藩は保守的で、「時の藩庁は洋学を視て切支丹だ、醜夷の学問だと認定して、公然学ぶことを許さない。若し学ぶ者があれば見当り次第鉄窓の下に繋ぐ掟であった。それ故であったかどうだか児玉先生は遂に伊木家に容れられず浪人して大坂に行き……（中略）余（黒田綱彦、一八五〇―一九一三）が漸く五歳（安政元年）の頃、先生は岡山小橋町に居を構えて居て、余が家と僅に五、六軒を隔つるのみであった。或る時先生は隣家の甲乙を集めて語るに、西洋の事情を以てした。其の一節にパリやロンドンといふ都会では家を作るに柱を建てず、壁を塗らず、砥石の様な瓦を積み重ねて薬を流しかけるのである。すると不思議にも瓦が岩の様になって、驚く程堅固な家ができると言われた。この一語は痛く余の脳漿を刺激した。これが余が十歳の頃、人目を忍んで洋書に肝胆を凝した素因となったのである。（中略）文久の末年、洋

学の率先者児玉順蔵先生はすでに岡山の地には居ない。されど三五の門弟があったが、遺憾にも其門弟が此地に在るということを知らないでいた。のみならず迂濶に人に尋ねることもできない時代であった。わずかに山川正朔先生（伊東玄朴門人）が先進であると聞いて、強いて其許に蘭学の指南を求めた。先生は、『蘭学を学んで何の用にする。』と言われた。余は、『勧王の為である。』と答えると、先生は忽ち色を変えて、『医師の外、決して学ぶものでは無い。別けて勤王家などと口にするさえ論の外である。』と物の見事に叱り飛ばして再び言葉を交えてくれなかった。そこで慶応元、二、三の満三年は勃々禁じ難い志を抱いて空しく時日を経過した」（黒田綱彦「懐古談」）[一三]。

山川正朔[一四]（一八一四―一八八二）は嘉永六年（一八五三）に伊東玄朴の象先堂に入門、止宿し蘭学を学び、安政二年（一八五五）正月、「蘭学医術共志深功之趣相聞候ニ付」五人扶持惣医者として江戸で召抱えられ、さらに蘭学御用を命ぜられた。そしてひきつづき三―五年間止宿し、蘭学の修行することが許可される一方、江戸在住の蘭学執心の者数名に対して、藩の屋敷内で蘭学を教えた。安政六年（一八五九）十一月藩内児島郡日比沖に来航したイギリス軍艦との応接を命ぜられ出張し、提督とオランダ語で応接した。その結果、無事英艦を江戸に向わせるという大任を果した。

このような蘭学者山川をして、上述の言を吐かしめた備前藩の蘭学を学ぶ環境がどのようであったかを測り知ることができる。

備前藩主池田慶政は、文久三年（一八六三）二月水戸の徳川斉昭の子九郎麿（茂政、一八三九―一八九七）を養嗣子とし藩主に迎え、藩主を退いた。攘夷派の斉昭の子息を藩主に迎えるという状況は藩中枢部の思想動向を察することができる。

順蔵の門人の一人花房義質（一八四二―一九一七、駐朝鮮、ロシア公使、宮内次官、日本赤十字社長を歴任、子爵）は、順蔵について次のように語っている[一五]。

「翁（順蔵）は医を本業とすれども、和漢の学にも通じ、洋書は天文、暦術、兵制のことにも渉り、予等初学の者にもしばしば世界の大勢を語り、政治、兵制の改革せざるべからざる所以を説き、また銃砲の器たる今日のごとく一人一家の技

術としてのみ用うべきものにあらず、天下一般の制度をもってこれを定め用うべきものなり。故に砲術というよりはむしろ砲制というまでに政治、兵制共に改めざるべからずと言えることあり。これが、予が全国統一の政体確立せざれば、外国に対峙するに足らざるを悟るの始めなりし。」

また義質の弟直三郎は、父端連（岡山市初代市長）についての懐古談の中で順蔵について次のように言及している。

「随って洋学も学ばねばならないということは（父端連は）早くから気がついていた。しかし自分はとてもやって居る間がないというので、兄（義質）を児玉順蔵に頼んで蘭学を学ばせたのである。それは丁度兄が十五、六歳の時（安政二―三年）の時で維新前十年程のことであります。（中略）児玉という人も頗る識言家であったが、少し偏屈な人で、伊木の抱医者であったが、自分の二階より外に容易に出たことがないという人であって、医者でありながら病人を診てくれというても、気が向かなければ行かぬという風な人であった。そういう風変りな人であったが、父の所へはよく話に来て、私の家の者などは能く児玉に診てもらったことがあるそうです。」

また門人の一人松岡隣（手塚律蔵の門人、画家松岡寿の父）は「記岡山西学開祖児玉先事文」[(二)(六)]の中で、「然ルニ先生気宇超然、擎跪（ものをささげてひざまずく）曲拳（身体を屈して礼をする）を屑（イサギヨ）しとせず、晩年遂に休暇を乞い遊び大坂に寓す。緒方洪庵と相往来し専ら蘭籍を翻訳するを以て娯となす。今存する所の病学渕源、医宗玉海等は是なり」と述べており、納得するのでなければ、上司にも屈せず、世間的には偏屈な人間として通っていたようである。

順蔵は備前藩の陪臣であり、藩当局は彼の蘭学の才能を活用しなかったため悶悶の日日を蘭書の翻訳、少数の門弟に蘭学を教えることで過ごし、自らを慰めていたのであろう。嘉永五年（一八五二）十二月（五一歳）には長病のため御番方を免ぜられ、御医者末席に格下げされた。その上、同藩士夏井嘉吉にとついでいた一人娘ヒサは精神病のため離縁となり、一女センを伴って順蔵のもとに帰っていた。このような事が重なり、蘭書翻訳に専念するためのほか、娘の治療のため、主家伊木家を辞し、大坂に転居することを決意したものであろう。それは安政五年（一八五八）のことであった。

この頃、順蔵の様子に異状なものがあった。黒田藩藩医武谷祐之（順蔵の門人元立の子）は藩主長溥の江戸参府に随行し、安政三年八月五日福岡を出発した。八月中旬頃と思われるが、祐之（椋亭）は小休止した岡山で順蔵を訪れた。この時の様子を「南柯一夢（二）」[四]の中で、「備前岡山御小休、御願ヒ許可ヲ得、児玉順蔵ヲ訪フ、疎濶ノ情ヲ述ベリ、予ガ抜擢異数ヲ祝セリ、然ルニ弘化三年（一八四六）大坂緒方先生許ニテ逢遇セシ時ニ比スレバ精神茫昧タリ、生来神経鋭敏ノ質タリシガ狂疾ノ萠シタリシ」と記している。

本藩の直臣でなく、陪臣で、五人扶持という薄給、蘭学に疎い備前藩当局の処遇は、順蔵を酒に浸らせ、性格をゆがめていったのであろうか。

自著『公氏医宗玉海』（万延元年刊）の例言（安政六年初冬識）の中で「去歳大坂ニ遊ビ洪庵ニ乞テ借覧ス、時ニ女児大患ニ罹リ加フルニ姻家（夏井氏）ノ為ニ憤懣スル所アリ、故ニ読書ノ外、毫シモ消遣スル（憂を消しやる）コトナシ」と識している。

大坂に転居してからは読書に専念、特にオランダの病理学書の翻訳に意欲を燃した。前述のように、ドイツ内科学教授コンラジの『病理学総論』（通論）の蘭訳本（アムステルダムの医師ストクフィス Stockvis 蘭訳、一八三五年刊）を緒方洪庵から借用翻訳し、『公氏医宗玉海』と題して万延元年（一八六〇）初夏、三巻三冊を出版した。内容は「熱病」の「総論」と「各論」すなわち単純疝衝熱、神経熱、腐敗熱、胃腸熱、発黄熱、伝染疫、間歇熱について論じ、巻三末に薬方譜六枚が附されている。本書の出版はこの三冊のみであるが、第二〇巻の稿本[六]が残されているところをみると、すべての巻の出版を望んだのであろうが、志は中途で挫折した。

これと平行し、「施療日用急索ノ書一本ヲ以テ坐右ニ置カント」し、コンラジの『病理学各論』を訳し、これを基幹とし、次の諸書を参考にした。「スプレンゲルノ医学通論、フーフェランドノ経験遺訓ヲ折衷シ、更ニ（遠西）名物考、同補遺、（和蘭）薬鏡、舎密開宗、（ワートル）薬性論諸著書ノ性効、主治、製法、服量ヲ薬品方剤ノ下ニ鈔録シ、全部ヲ節略シ

テ以テ袖珍本ト為シ私ニ題シテ玉海寧要ト謂フ（順蔵識の序例より）。」

たまたま順蔵が緒方洪庵と話をしているうちに、この『玉海寧要』の稿本を出して洪庵に見せたところ、「此書益有リ必ズ行フベシ」と勧められ、出版にふみきった。全六巻を出版する予定であったが、実際に刊行されたものは第一、二巻の二冊のみであった。これには洪庵の序文（二枚）がつけられ、その中で「此ノ編、論ズル病証ノ条縷頗ル正シク、載セル薬術甚ダ確カ、採摭（サイセキ）（拾いとること）極メテ浩博、真ニ刀圭家ノ玉海ナリ、珊瑚、珍珠拾フ無クンバ得ズ」と賛辞を呈している。

順蔵の著訳書には、文久元年（一八六一）二月刊の『公氏病学渕源』と『公氏病学各論』がある。前者は第十巻まで出版されたようであるが、筆者は第九巻のみ見ており、後者は未見であるので今回はこれには触れないが、順蔵はコンラジの病理学書の翻訳、出版に全力を注いだ。しかし経済的に恵まれず、また病身の出もどった娘、孫女を気づかいながら、訳書の全刊行を見ることなく、文久元年九月二日、大坂の自宅で五十七歳の一生を終えた。瑞光寺（大阪市北区東寺町）に埋葬された。瑞光寺過去帳によれば、「居中庵庸心寿居士、文久元年九月朔日、児玉順蔵、土葬」と記されているとのことである。現存する墓は、かなりあとになって子孫によって建立されたものと考えられる。大正天皇即位を記念して、物故志士先哲の顕彰を行われたが、門弟花房義質、黒田綱彦らの尽力により、大正四年（一九一五）十一月十日正五位を贈られた。位記は神戸市在住児玉順三医博のもとにある。

## 二、難波抱節（一七九一―一八五九）

通称は初め本立、改めて立愿、字は子敬、諱は経恭、号は抱節、ほかに鳩窠とも号した。抱節は寛政三年八月三十一日岡山で篠野貞文（のち五十村と改姓）の次男として生れたが、享和元年（一八〇一）、父を失い、叔父篠野盛堅に養われたが、のち備前藩家老日置氏（金川を領有）の侍医難波立達（三代目）の養嗣となった。文化八年（一八一一）春、京都の吉益南涯

に本道を、賀川蘭斎に産科を学んだ。同年十月南涯の金匱要略の講義を筆記し、これを『金匱要略記聞』[一六]と名付けた。文化九年八月には師蘭斎より治術秘訣及び家書伝授の免許状を授けられた。また蘭斎から口授を受けたものを『産科紀聞』[一七]四巻にまとめた。自筆の「序」は文化十年七月、京都執中館で記している。

この中で「余辛未(文化八年)春、京師ニ客游シ、医ヲ吉益氏ニ受ケテ、産科ハ賀川先生ニ学ブ、先生ノ業ヲ為スニ朝肄夕校、面シロ授ヲ命ズ、余ヤ随聞随記、玆ニ三年其ノ記録スルコト錯誤一ニアラズ、今玆七月将ニ郷ニ還ラントシ、再ビ之ヲ校讐(考えしらべる)シ、科条(箇條)ヲ分別シ、彙類(同じ類)ヲ区畛(クシン)(区割り)シ、輯メテ四巻トナス、皆先生ノ歴世試験中ニ出ズ……」。

この序に記したように二年数カ月の京都遊学を終わり、帰郷するにあたり、この『産科紀聞』を編輯した。この年六月十三日南涯が死去しているので、これも帰郷を決意した原因の一つかも知れない。この年の七月あるいは八月に帰郷したと思われる。しかし翌文化十一年(一八一四)春、泉州堺の華岡鹿城(青洲の弟)の塾に入門、外科を学んだ。ついで紀伊平山の塾に入門したと思われる。平山塾の門人帳には文化十一年四月二十四日金川、難波立原と記されている。ここで乳癌の手術や脱疽の切断術を学んだ。後年これらの手術が郷里備前金川で施行されるのである(後述)。この年『校本観証弁疑附言』を著述し、一方『一角纂考』[一九]を写本している。翌文化十二年に帰郷、産科、外科を中心に診療を行うと共に、思誠堂塾を開き、多くの門人を養成した。その診療症例は自著の『胎産新書』[二〇]、『瘡瘍新書』[二一]、及び長男経直(東里)著『外科小補』[二二]に多く記述されている。『胎産新書』にはこのほか多くの門弟や交遊のあった知人の名が記されている。これらの著書その他から門人約七十名、交遊関係を示す十数人を確認できる。

### 抱節の乳癌手術

『胎産新書』巻一、用薬の項に二人の妊娠中の婦人の乳癌摘出のことが記されている。すなわち、㈠「児嶋上村辰次女、二十二、乳癌ヲ患(ウレ)フ、来リテ治ヲ請フ、タマタマ受胎七カ月、蒙汗薬ヲ服ス、方中風茄子烏頭有リ、候其酔迷、割リ

テコレヲ取ル、二十余日全ク愈ユ、期ニ及ビ女ヲ産ム、今ニ三十余年、其ノ女スデニ嫁シ男ヲ産ム、母マタ恙ナシ。（文政年間の初めに手術したことになる）

(二)和気郡塩田村林蔵妻三十六、妊娠六カ月、乳癌ヲ患フ、前剤ヲ服シ、コレヲ療ス、コレヲ秤ルニ巌重（ママ）百三十銭（約四八五グラム）、妨ゲ無シ、

また嘉永元年（一八四八）三月に因州鳥取の婦人の乳癌摘出術を行っているが、常人の三倍量の麻酔薬を用いて酔迷状態を得たという症例としてあげている（『外科小補』）。

難波経直（『抱節の長男』）は『外科小補』の中で、「起廃甲之巻、麻沸湯論条評」の項目で、麻沸や麻沸湯という語の文献上の由来を述べ、麻沸湯の名前は不適当で、麻薬とすべきとしている。そして蒙汗薬の語を多用している。またこの文中で、「麻薬華岡子其ノ伝ヲ秘ス、家君（抱節）弟子ト躬親嘗試シ、以テ其ノ方ヲ定ム、毎年療スル所数十人ヲ下ラズ、ホトンド将ニ五十年ニナラントス、其ノ効、奏セザル者無シ」と記している。この経直が豊後日出の帆足万里の塾に遊学した時、経直は袖手疽（包茎）の男を麻薬を用いて治療した。この時烏頭を方中に伍したが、その毒は慓悍であるので、これは除いた方がよいと考え、万里に相談したところ、同じ考えであったと記している。以後烏頭を除いて「一物（記していないが蔓陀羅華と考えられる）一銭弐分、当帰、川芎、天南星、白芷各弐分、右五味、各別ニ細剉シ、修合剤トナス、水三升ヲモッテ又火煮シ、一升ヲ取ル」と製法を記し、さらにこの薬を用いるには、二、三日前から飲食を撰択し、強壮健胃剤を服用させ、当日は朝食は止め、これを頓服させる。壮者は標準量で、やせている者は三分の二、小児で十歳内外は半量とすべきであると記している。そしてこの薬を服用して一時（今の二時間）後、手術をすべきである。やや速いものは半時（一時間）もすぎないで麻倒し、最も速い者は、飲みほすとすぐに手痺を覚え、言語が思うようにならない。そして「此ノ薬ヲ服シ麻倒セザル者千百人中或ハ一、二有リ、其ノ人皆強忍シ、能ク其ノ痛苦ニ耐フ」と述べ、青洲先生の方法も、鎌田玄台の論じているのとほぼ同じく、詳しくは『瘡瘍新書』に書いてある。「凡ソ医ハ頑肉ヲ割リ病疾ヲ去ルニ、此ノ

薬欠クベカラズ」と述べている。春林軒塾から麻酔法を備前金川に導入し、毎年数十人の外科手術患者に五十年にわたって応用し、その術を長男、門人達に伝授した。

経直のいうように青洲は通仙散の処方は秘密にしたのであろうか、あるいはまた特別の免許を得た者に伝授したのであろうか。経直の記述によれば、彼もまた春林軒塾に学んだ。門人録中の「天保二年九月二四日、備前金川、難波敬哉」が経直と考えられる。

また抱節あるいは長男経直の門人が抱節の乳癌手術のことについて書きのこしている。

一、備中千原村直吉の妻三十七歳が三、四年前より乳癌を患い、初め梅位の大きさであったが次第に大きくなり南京位になった。安政三年初秋(七月)、微痛を覚え、七月下旬抱節先生に治を請うた。診ると乳癌で、すでに反花状になろうとしていた。そのため抱節は治療することを辞退したが、病家は強いて治を乞うて言うには「死生は先生に任すのみです」。それで止むをえず八月二十日、蒙汗薬を与え、乳頭上を一字に截断し、消息子で乳核近くに達したが力及ばず、皮核が離間し、砕破し数片となってしまった。核内は空虚で、稀水が有った。先生が言うには、果して反花状であった。「今から数カ月で治るであろうか」と。周囲処々岩肉を切り、縫合せず、羔を貼り縛帯をした（原漢文、岡村盛純識）。(二四)

一、経直の門人生田安宅（のち広瀬元恭に入門、明治八年岡山県病院の初代病院長となる）は、当時（十六歳）次のように記している「往歳（安政元年）四月金川抱節難波翁乳岩ヲ切断ス、我ガ東里（経直）先生ノ塾徒皆行キテ之ヲ視ル、慎（安宅の幼名）マタ随行ス、八、九月又乳岩及ビ脱疽ヲ切断スル者三四人、慎タマタマ眼疾ニ罹リ行クヲ果サズ、今ニ恨トナス」(二五)と記し、抱節の大医たる理由、著書について述べている。そのほか生田安宅は後年（三十四、五年後）、約八百字（漢文）の『難波抱節伝』(二四)を書いている。これによると、生田が門人簿を見た時、飛騨国一国を除いて全国から集まっていたという。

緒方正清は、岡山市天瀬で外科及び耳鼻咽喉科を開業していた抱節の孫立達の所蔵していた産科器具を実見し、そしてまた『胎産新書』内容を検討した。そして彼の大著『日本産科学史』(八)の中で、胎産新書を詳しく紹介、批評している。そ

の結論として、「難波抱節の胎産新書は、従来の産科書に卓越し、議論斬新、実例豊富にして引証的確なり。然も和漢の成書（注、医書一一〇種、中国の儒書八七種、仏教書一二種、和書一六種、計二百三十五種）を渉猟し、之れに西洋医学を加味したるを以て徳川季世に於ける最良の産科書として推称する値あり。」と激賞している。

引用書目として二三五種を列記しているが、医書の約八割が中国の医書で、蘭方系として、『解体新書』と野呂天然著「生象止観」をあげている。

難波経直（一八一八―一八八四）二代目立愿

文政元年、難波抱節の長男として備前金川に生れる。抱節は経直が「固陋偏僻ノ人トナルヲ欲セズ、師ヲ択ビ学ニ就キ、雪ニ立チ股ヲ刺シ、心ヲ神聖ノ道ニ存シ、力ヲ活人ノ術ニ尽サシム」[二五]るため、吉益周助（南涯？）華岡青洲、賀川蘭斎、藤沢東涯、亀井昭陽に学ばしめ、最後に豊後日出の帆足万里に学んだ。

経直が幼くして大坂に遊学（吉益塾か）していた時、たまたま抱節が東遊した折、経直をつれて華岡青洲に入門した。談論中青洲は鎖肛図解を示してその手術法を説明したことを、自著『外科小補』の中で記している。他の自著で入門を「天保紀元」とも述べているが、門人録では天保二年九月二四日備前金川難波敬哉とあるのが、経直と思われる。父抱節に連れられていったのが天保元年であり、一旦大坂に帰り改めて翌年入門したのであろうか。父の死後、抱節の学塾思誠堂を引き継ぎ、多くの門弟を養成し、のち岡山市天瀬に移り、府下の医界で漢蘭折衷医家として重きをなした。そのほか著書として、『種痘伝習録』[二六]があり、この書の末尾には一八七六年（明治九）頃の「岡山県救助種痘医名簿」が添えられており、備前国一一〇名、備中国三六名、美作国三四名の名前が列記され、そのあとに、「右ハ内外医科、正直廉耻、種痘料ヲ資セザル好生ノ医員協議済生ノ名簿ナリ」と記している。

## 終りに

不遇のうちに一生を終った備前藩陪臣の蘭方医児玉順蔵、同じ陪臣の漢蘭折衷医の難波抱節という代表的備前国の医師をとりあげ、概説した。同時代に生き、同じ藩であったが二人の直接交流を示す資料はない。全く相反する対照的な一生であった。

なお抱節およびその一門の牛痘接種、洪庵との種痘を通じての交流は拙著(一)(二七)(二八)をお読みいただきたい。

## 文献


(一) 中山　沃『岡山の医学』日本文教出版、岡山、一九七六（昭和五十一）。
(二) 中山　沃「蘭学を学んだ岡山の医師群像—海上随鷗の門人」『洋学資料による日本文化史の研究』Ⅱ、一頁、岡山、一九八九（平成元）。
(三) 森紀久男『備前洋学の開祖児玉順蔵先生』、岡山、一九四一（昭和十六）。
(四) 井上忠校訂「武谷祐之著、南柯一夢(一)」『九州文化史研究所紀要』一〇号、七一頁、一九六三（昭和三十八）。(二)『同紀要』十一号、二四九頁、一九六六（昭和四十一）。
(五) 田中助一氏より中山沃への私信、一九七三（昭和四十八）。
(六) 中山　沃「児玉家文書について」『蘭学資料研究会研究報告』、二七一号、三三頁、一九七三（昭和四十八）。
(七) 森紀久男『抱節難波立愿先生』、一九四一（昭和十六）。
(八) 緒方正清『日本産科学史』、一九一九（大正八年）、一九八〇（昭和五十五）復刻、六八七頁。
(九) 三浦豊彦「労研蔵『温知堂文庫』の旧蔵者難波抱節」『労働の科学』一〇号、一九七八（昭和五十三）。
(一〇) 労働科学研究所編「難波抱節（立愿）旧蔵書『温知堂文庫』目録(1)—(13)」『労働科学』五四巻一一号—五五巻一三号、一九七八—一九七九（昭和五十三～五十四）。
(一一) 児玉順蔵「奉公書」、岡山大学図書館蔵「池田家文庫」。

(一二)「幽恵武谷（元立）之墓」碑文、（前略）
中年西洋医方ヲ志ス、タマタマ澳医椎剝留（シイボルト）等ノ門弟児玉順蔵来リ過ギ、コレヲ家ニ留ルコト三年、新方ヲ聴クコトヲ得、已ニシテ椎氏、和蘭甲比丹ニ随イ幕府ヲ観ルノ途、本郡木屋瀬駅ニ館ス、翁館ニ就キ椎氏ヲ訪フ、ノチ同志百武万里、有吉周平、原田種彦数人ヲ得、倶ニ長崎ニ到リ、椎ノ講学ニ親炙シ大イニ得ル所有リ、時ニ翁四十二（以下略、原漢文）。
(一三) 岡山県教育会編『岡山県教育史』上巻、一九四二（昭和十七）。
(一四) 中山　沃「ある地方蘭学者の英人との対談」『蘭学資料研究会研究報告』二五九号、一九七二（昭和四十七）。
(一五) 黒瀬義門編『子爵花房義質君事略』、一九一三（大正二）。
(一六) 難波抱節『金匱要略記聞』写、岡利幸蔵。
(一七) 難波抱節『産科紀聞』写、仲田文四郎蔵。
(一八) 難波抱節『校本観証弁疑附言』写、筆者蔵。
(一九)『一角纂考』労研蔵。
(二〇) 難波抱節『胎産新書』一八三九（天保十年）写、筆者蔵。
(二一) 難波抱節『胎産新書』写、一八五四（嘉永六）の多紀元堅の序文のある完結本。
(二二) 難波抱節『瘡瘍新書』未発見、門人写の「瘡瘍新書図」一冊のみ、労研蔵。
(二三) 難波経直『外科小補』上、中、下巻三冊、一八五六（安政四）序文、経直撰。
(二四) 生田安宅文書、生田啓吉蔵、岡大医学部資料室寄託。
(二五) 難波経直『温古知新医学範』、一八七六（明治九）筆者及び労研蔵。
(二六) 難波経直『種痘伝習録』、一八七六（明治九）、仲田文四郎及び労研蔵。
(二七) 中山　沃「難波抱節と緒方洪庵」『医学選粋』四号、一九七五（昭和五十）。
(二八) 中山　沃「岡山地方の牛痘接種の初め」『医学選粋』二四号、一九八〇。

（兵庫県西宮市）

# Junzo Kodama, a pioneer of Dutch learning in the Bizen feudal clan, and Hosetsu Nanba, an eclectic of Chinese and Dutch medicines

by Sosogu NAKAYAMA

J.Kodama (1806-1861) and H.Nanba (1791-1859) were the physicians to the chief retainers of the Bizen feudal clan; Mr. Iki and Mr. Hiki. They lived in the same age, but Kodama lived in obscurity all his life, while Nanba spent his life in famous circumstances. Kodama absconded from the Bizen feudal clan and studied Dutch learning at the private school in Nagasaki which had been founded by Dr. Ph. F. von Siebold. But on returning to his native shores his superior officers had no regard for his Dutch learning, resulting in his moving to Osaka, where he died. Nanba learned Chinese medicine from Nangai Yoshimasu, obstetrics from Ransai Kagawa, and surgery from Rokujyō Hanaoka and Seishū Hanaoka. On returning to his native shores, Kanagawa, he founded a private school for the study of medicine, Shiseido, and cultivated many physicians by writing medical books extensively.

The author has described their activity on the basis of new materials.